

サルトルの『嘔吐』について

末次, 弘

<https://doi.org/10.15017/2328710>

出版情報：哲學年報. 30, pp.79-99, 1971-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



サルトルの『嘔吐』について

末 次 弘

サルトルの『嘔吐』が、わが国に紹介されて既に久しい。文学に関係している人たちだけでなく、哲学者たちも、この作品について多くを語っている。ところで、哲学者たちのほとんどは『嘔吐』を、サルトル哲学における即自存在 (être-en-soi) との関係において、あるいは即自存在との関係においてだけ、取上げている。その取上げ方にしても、その解釈にしても、彼らは似たりよったりである。そこに見られるものは、嘔吐が即自存在の開示される仕方、あるいは即自存在の存在が開示される仕方であるという考えにつきる。確かに、このような考えはその通りだと言うよりほかにないように、一見、思われる。

あるとき、人は嘔気に襲われる。なにかが彼のうちに起る。しかし、それは病気のような具合にやってきて、気づかれないうちに成長する。嘔吐は波状的に人間を襲い、ますます深く彼を捉え、ついにうちのめす。サルトルはこのことを物語の経糸として用い、主人公・ロカンタンの日記の形で展開してゆく。順を追って、それを取り出してみよう。

1月初旬^(註)。土曜日、海辺で子供たちが水切りをして遊んでいた。ロカタンも水切りをしようとして石を拾う。彼は何かを眺め、そしてそれが彼にいやな気を起させた。彼は石を落して立去る。

再び、土曜日のようなことが起る。

1月29日^(註)。「何かが私のうちに起った、もう疑う余地がない。それは普通の確信とか、はっきりした証拠とかのようにはなく、病気のような具合にやってきた」

1月30日。「今朝八時十五分に図書館へ行こうとして、プランタニア・ホテルをでたとき、地面に落ちていた一枚の紙片を拾おうと思ったのだが、それができなかった」

「事物 (objet)、それに△触れる▽べきではない、なぜならそれらは生きてはいないから。人々は事物を使用し、片づけ、それらの間で暮らしている。事物は役に立つが、それ以上のなものでもない。ところが、私はそれらに触れるのが耐えられないのだ。まるでそれらが生きたものであるかのように、事物と関係をもつのは私には怖ろしい」そしてこのとき、ロカタンは理解する。海辺で水切りをしようとして、石を手にしたときの感じは嘔気のようなものであったこと、それは小石からやってきたことを。

2月2日。「そのとき、△嘔気▽ (La Nausée) が私を捉えた、私は腰かけの上にくずおれた、もう自分がどこにいるのかさえわからなかった、私はまわりをいろいろな色彩がゆっくりと舞うのを見ていた、嘔きたかった。そして、それ以来、△嘔気▽は私から離れず、私をしっかき捉えてしまった」

「彼の青い木綿のシャツは、チョコレート色の壁の上に染しそうに浮き上って見える。それもまた、△嘔気▽を催させる。あるいはむしろ△それが嘔気だ▽ (c'est la Nausée)。△嘔気▽は私の内部にはない」

カフェでのこの嘔吐は、ロカンタンにとってそれまでのとは異なる新しい経験であった。

2月20日。「私は吐きたい―あれが―一挙にそこに存在する、△嘔気▽ (la Nausée) が」メゾン・ポタネで独学者と昼食をしながら話しているとき、ロカンタンは嘔気に襲われる。それはこれまでのいくつかの嘔気のうちで、もっとも強い嘔気であった。彼は飛び出すようにそこを出る。しかし、彼は行くべきところを知らない。海辺に出るが、そこにもいたたまれず、ロカンタンは電車に飛び乗る。が、そこに醜悪な、頑固な巨人のような姿で、事物がいる。たったひとり、合言葉もなく、何の防禦もなく、下からも、うしろからも、上からも、事物にとり囲まれて。正面の座席に半身不随の男。ロカンタンは耐えきれず、停車場も待たずに、飛びおる。公園のベンチにくずおれるように座る。しかし、ついに、一挙に幕が裂け、嘔気が炸裂する。

以上のように、水切りをしようとして拾った小石から始まり、公園のマロニエの根において絶頂にたつる嘔吐は事物が、即自存在が開示される仕方であると言うほかないようである。けれども、公園における「嘔吐」の去ったあと、夕方、ホテルで、ロカンタンがこの体験のなかで得た啓示 (illumination) を記述し、それをとおしてさらに考察を深めている所で、「嘔気はこの私自身なのだ (c'est moi)」と、サルトルは言っている。もし嘔気は即自存在が開示される仕方であるということにつきるなら、サルトルにおいて人間は即自存在ではないのだから、「嘔気は私だ」と

言うことはできないであろう。したがって、サルトルにおける「嘔吐」をたんに、事物が、即自存在が開示される仕方であると解釈する見方を受けいれることはできない。わたし(たち)は新たな仕方で、サルトルにおける「嘔吐」の体験に迫らねばならない。さしあたりまず、嘔吐のなかで得られた啓示とそれに続く考察を、検討することにしよう。

二

確かに、嘔吐は事物からやってくる、嘔吐が人を襲うのだから。まさにそれ故、嘔吐に襲われる人は初めのうち、それがなんであり、どこからくるか解らない。嘔吐は波のように人を襲い、ついに絶頂へと昇りつめるのだ。どんなかすかな嘔吐も、公園のベンチでの「嘔吐」も、出来事のかぎりでは、それだけで完結した嘔吐である。それにもかかわらず、嘔吐が一つのプロセスを持つということ、あるいは嘔吐が日常的に誰れにでも見られる現象ではないという事実は、一体、なにを意味しているであろうか。嘔吐に襲われたロカンタンのうちに、なにかが起った。この何かとは、変化にほかならない。変ったのが世界であれ、彼自身であれ、はっきりしていることはロカンタンの存在にたいする見方が変ってきたということである。あるいは、存在が別様に現われることを可能にするよう、存在によって変えられた、と言うべきなのかも知れない。

ロカンタンはあの公園における「嘔吐」の二、三日前でさえ、他の人々と同じであった。事物を眺めているときでさえ、彼は事物が存在しているというを思うにはいたらなかった。「海は緑で△ある▽(est)、あの空の白い点は鷗で△ある▽」と、彼は言っていた。しかし、鷗が△存在する鷗▽(«mouette-existante»)であることに、彼は気

がつかなかった。「海は緑である」と言うとき、彼は海が緑色をした事物の部門に属している、あるいは緑が海のさまざまな性質の一部をなしていると考えていた。そしてもし、存在とはなんであるかと問われたなら、それはなにもでもない、存在とは、外から事物にやってきて、事物の本性をなす一つ変えることなく事物に付加される空虚な形式であると、彼は答えたであろう。ところが、公園において「嘔吐」を体験するほんの少し前、ロカントンは電車の中で名づけようもない事物によってとり囲まれた。そこでは、事物はそれにつけられている名称から、言葉から、觀念から抜けだし、そのものとして、ただそこに在った。そしてついに、あの公園における「嘔吐」において、道具とか、装置といった事物の人間的な装いはすっかり消えうせ、軟らかい、秩序のない塊り、恐ろしいみだらなむきだしの怪物じみた塊り (masses) だけが現われたのだ。

普通、存在はかくれている。われわれは存在について語ることはできないが、 \wedge 存在する \vee ということがどのような意味を持っているかを考えることはない。われわれは事物を、道具として扱い、使いふるされた言葉で捉えるだけである。事物はわれわれにとって有用なもの以上ではない。しかし、まさしく「嘔吐」において、事物はその人間的な装いをはぎとって、それが在るがままに、むきだしの塊りとして現われるのである。

ところで、事物が「嘔吐」において、軟らかい秩序のない塊り、恐ろしいみだらなむきだしの怪物じみた塊りとして現われるので、人は嘔気を催すのであろうか。事物がむきだしの塊りとして現われるのは、事物がその在るがままに現われる唯一の在り方であって、事物の存在の存在開示ではないのではなからうか。事実、サルトルは事物のこの現われを述べたあと、事物について、言葉なしに、事物でもって考えたことを記述している。「それぞれ存在するも

のは、当惑し、なんとなく不安で、互いに他のものとの関係において余計なもの (*de trop*) であるということを感じあっていた。「私の正面の斜め左のマロニエの樹、それは△余計なもの (△ *de trop*) である。ラ・ヴェレダも△余計なもの (△ *de trop*)。そして△私は▽ (*moi*) — 意地悪く、疲れ、みだらで、陰気な考えを反芻している — △この私も余計なもの (△ *moi aussi j'étais de trop*)」余計なものという表現は人間的なもの (イメージを想起させるが、存在する理由をもたないということ以外のなものも意味していない。つまり、存在は偶然 (*la contingence*) ということである。存在するとは、たんに、そこに存在するということである。定義すれば、存在は必然ではないということである。存在は偶然であり、絶対的なもの (*l'absolu*)、したがって完全な無償 (*la gratuité parfaite*) である。「すべてが無償である、この公園も、この街も、私自身も (*Tout est gratuité, ce jardin, cette ville et moi-même*)」

かくて、「嘔吐」において人が嘔気を催すのは、事物がその日常的なヴェールをはがれ、軟らかい、秩序のない塊り、恐しいみだらなむきだしの怪物じみた塊りとして現われるからでないことは明白である。存在が、この公園も、この街も、私自身も、いかなる必然的な存在理由もないということ、存在はただそこに、たまたまそうして存在しているということ、この存在の真相に直面することから、嘔気はやってくるのだ。「すべてが無償である、この公園も、この街も、私自身も。このことを理解するに到るとき、それは人々の考えを変え、すべてが、いつかの晩の△鉄道員さんの店▽におけるように、漂いはじめる。それが△嘔気▽ (*la Nausee*) なのである」

さらに、このことから直ちに理解されるように、嘔気がやってくるのは即自存在からではない。事物とか、即自存在とか、人間存在とか、そのように区別されるどれかの存在からではなく、あらゆる存在の存在から、嘔吐はやって

くると言うほかない。

三

テキストに表現されたかぎりのものから見れば、このように「存在するすべてのものから嘔吐はやってくる」と結論するほかないとしても、存在するものならどんなものにも、またどのような条件においても、わたしたちは嘔気を催すのであろうか。このことを検討するために、ロカンタンのうちに起った出来事をもう一度、考えてみることにしよう。彼のうちに起った出来事とは変化にほかならなかった。この変化の核心をなすものはロカンタンの、存在にたいする見方の変化というのであった。もちろん、このことは変化のすべてを汲みつくすものではない。波状的に襲ってくる嘔気をとおして惹起される変化には、なお、どのようなことが含まれているであろうか。

1月30日。ロカンタンは中部ヨーロッパ、北アフリカ、極東方面を六年間ほど旅行したあと、ド・ロルボン侯爵に関する歴史上の研究を完成するため、三年前から、ブウヴィルに滞在していた。彼はまったくのひとりであった。彼は日常生活上のやむを得ないこと以外、決して誰れとも話さなかったし、何も受けとらず、また何も与えもしなかった。彼は孤独であった。

けれども、この日、ロカンタンは自分が孤独のアマチュアにすぎなかったことを知る。彼はいままで、いつも世間の人々のすぐ側において、孤独の表面にとどまり、危険な場合には、人々の間へ避難しようと心にきめていた。し

かし、孤独の道を進みすぎたこと、人々の間へ避難することはもはやできないことを、彼は知るのである。この孤独の深まりが嘔気によってであると言うことはできないとしても、取りかえしのつかないまでに孤独であるという自己認識が嘔気による変化をとおしてであることは、確かであろう。

2月2日。それまで唯一の避難所であったカフェで、ロカントンは嘔気に襲われる。それは今まで経験したことのない新しい嘔気の体験であった。

2月9日。ロカントンは知らないうちに、思い出のなかに、過去のなかに逃れようとする。しかし、それは失敗に終る。「私は自分の現在をもって、追憶を作り上げる。現在からでようとして現在の中に投げ戻され、現在の中にすてられる。過去に合体しようとして私は失敗する。私は現在から逃れることができない。」

2月10日。今度は、瞬間を、現在を旋律のようなものに変えようとする。「私は私の生活の各瞬間が、人が追憶するときの生活の瞬間のように経過し、統一されるのを望んだ。それは時間を尻尾から捕えようと試みることと、同じことであつたらしい」ロカントンは完結することのない現在に直面させられる。

2月13日。経験のうちに、即ち過去のうちに支えを求め、そうすることによって現在を逃れ、自己を守っている医師・ロジェを批判する。しかし、その批判はロカントン自身にたいする批判でもあるだろう。と言うのも、ロカントンのうちに生じた動揺は既にかなり進行しているのだから。

2月14日。「△怖れてはならない▽(*Il ne faut pas avoir peur*)」とだけ、イタリックで記されている。

2月15日。ロカントンはド・ロールボンに関する原稿を四頁かくことができる。彼は幸福である。なぜなら、今では、

ド・ロールボンがロカントンにとって自分の存在の唯一の証拠であるのだから。だが、彼の存在の唯一の証拠も崩壊を始めている。ロカントンは歴史の価値について考えることを回避することによって、この崩壊をくい止めねばならないことがそのことを示しているであろう。

2月16日。濃い霧の日、それは崩壊のイメージであり、ロカントンの心象でもあるだろう。

2月17日。博物館の一室にずらりと飾られた、権利の化身そのもののようなパコム家の肖像はロカントンに、彼が存在する権利のないことを一層つよく自覚させる。

2月19日。遂に、ロカントンはド・ロールボンに関する著作を断念する。「お終いだ、もうそれを書くことができない」

ド・ロールボンはロカントンの共同者だった。彼はド・ロールボンに自分の存在を供給していた。逆に、ド・ロールボンは自分の生活をロカントンに代理させようとした。そのため、ロカントンは自分が存在していることにもはや気がつかなかった。彼はもはや自分のうちには存在しないで、ド・ロールボンのうちに存在していた。彼はド・ロールボンを生存させる方法でしかなかった。ド・ロールボンはロカントンの存在理由だった。したがって、ド・ロールボンに関する著作を断念したとき、ロカントンは存在理由を、生きる支えを自分のうちにも、自分の外にも見いだすことのできない自分の前に投げだされたのである。もはや、どこにも逃げ道のなくなった彼は、むきだしの自分の存在に直面するのを避けられなくなった。

2月20日。メゾン・ボタネで独学者と昼食中、ロカントンは烈しい嘔気に襲われる。彼はそこを出る。しかし、行く

べきところを知らない。海辺に出るが、そこにもいたたまれず、彼は電車に飛びのる。が、そこに醜悪な、頑固で、巨人のような姿で事物がいる。正面の座席に、半身不随の男。ロカンタンは耐えきれず、電車を飛びおりる。公園のベンチにくずおれるように坐る。しかし、ついに「嘔吐」が炸裂する。

以上の検討が示しているように、嘔気をとおして惹起されたロカンタンにおける変化のもう一つの構成契機は存在理由の崩壊ということである。たしかに、はっきり文章化された変化としては、ド・ロルボンに関する著作の断念ということであるけれども、それはあらゆる存在理由の崩壊という根底的な出来事を伴っているのである。過去にも、現在にも、先験的にも、経験的にも、自分のうちにも、自分のそこにも、彼は自分の存在理由をみいだすことができない。したがって、公園におけるあの「嘔吐」の炸裂は、ロカンタンのうちでの存在理由の動揺をとおして、彼の存在にたいする見方の変化が起り、存在理由の崩壊と存在にたいする見方の明確な変化によって、用意されたのだ。事物をとおして、存在によって人間のうちに惹起される変化が彼の存在理由の崩壊と存在にたいする見方の変化として現出することにより、在るがままの、事物の存在と人間存在、つまり自己自身に直面するとき、「嘔吐」はわたしたちに来てくるのだと、結論することができるであろう。

嘔吐はたんに事物から、すなわち即自存在だけからやってくるのではないこと、嘔吐は存在する全てのものから人間存在にやってくることを、わたし（たち）は前節において明らかにした。しかし、「嘔吐は存在する全てのものから人間存在にやってくる」と言うとき、それはどれでもよい一つの存在と人間存在との一面的で、ステティックな関

係としてではなく、事物と存在と人間存在との前述した二重の変化を中軸とするデュナミックな関係としてでなければならなかったのである。「嘔吐」はどこからくるかという問いをこのように解するとき、サルトルにおける「嘔吐」は、多くの人が主張したように即自在に重点が置かれていたのではなく、どちらかと言えば、むしろ人間存在そのものに重点が置かれていることは明白であろう。『存在と無』の緒論の中の、「存在はなんらかの直接的な接近の仕方、即ちたとえば倦怠とか、嘔気といった仕方で、われわれに開示される」^(註3)という文章が示すように、サルトル自身嘔吐を人間存在の深い意味を表わす一つの現象とみているのだから、『嘔吐』においても人間存在に重点が置かれていたことは疑いないであろう。

四

これまで、わたし(たち)は嘔吐をそれがどこからくるか、という点からだけ見てきた。いま、わたし(たち)は嘔吐をそれがなぜ嘔吐でなければならないか、という点から考えてみることにしよう。嘔気は事物をとおして人間存在にやってきたが、人が嘔吐を催すのは事物がその日常的なヴェールを、その人間的な装いはがれて、軟らかく、秩序のない塊り、恐しい、みだらなむきだしの怪物じみた塊りとして現われるからではなかった。存在が、この公園も、この街も、わたし自身も、いかなる必然的な存在理由もないということ、存在するものはすべてただそこに、たまたまそうして存在しているということ、この存在の真相に直面することから、嘔気はやってきた。

ところで、存在するものはすべてと言うとき、無差別的に存在が問題であるのではなく、なによりも人間存在が問

題であることを、わたし（たち）は前節において明らかにした。あの公園における「嘔吐」の炸裂は、一方で、事物がその在るがままの姿で現われることを、他方で、あらゆる存在理由の崩壊によって、ロカンタンがむきだしの自己自身に面と向うことの不可避性を前提にしている。しかも、事物がむきだしの塊りとして開示されることをおとして捉えられてくる（余計なもの）の、すなわち必然的な存在理由のなき、偶然性という事物の存在の意味把握は、人間存在についての同様な把握へと進むかぎりで、嘔気を惹起するのである。

しかし、わたしは必然的な存在理由を持たないということ、わたしは偶然で、無償であるということ、このことがなぜ、嘔気を惹起するのであろうか。まず指適しなければならぬが、『嘔吐』におけるサルトルの関心は技術的世界観（註4 vision technique du monde）にもとづく自己把握から、事物のむきだしの存在をとおして開かれてくる新たな、在るがままの自己に逢着することであったということである。つまり、道具はなにかのための道具である。たとえば、机はそこでわたしたちが勉強するためのものであり、また電気スタンドは机の上を明るくするためのものである、等々。しかも、このなにかのため、という本質は、道具が事実に存在する以前に、その道具をつくりだす人のうちに、あらかじめ存在している。したがって、道具の事実に存在はなにかのため、というその必然的な存在理由を確実に持っているわけである。このような道具の在り方から得られる見方をもって、普通、わたしたちは自然的な事物や人間存在をも見ているのである。これが、サルトルの言う技術的な世界観である。このような世界観のもとでは、人間を含めて、存在する全てのもはその必然的な存在理由を持っており、確乎たる秩序のもとに安らっている。そこには、不安や、怖れや疑いなどと言った安らぎを破壊する否定的なものはいりこむ余地はほとんどない。人々は

世界に没入するという仕方、生きていく。ところが、なんらかの仕方、世界への没入を妨げられた人は、ちょうど、孤独な生活をしていたロカンタンがあるとき、海辺で水切りをしようとして、嘔気のようなものに襲われたごとく、事物によって襲われ、ついには技術的な世界観を打ち破られ、むきだしの自己そのものに直面させられるということが起るのだ。技術的な世界観の安らかさに慣れ親しんできたわたしたちは、その安らかさはなんの確かな根拠もないのだけれども、自からの意志によってこの世界にやってきたのでもないのに、いかなる必然的な存在理由もなしに生きてゆかねばならないという、この自己そのものの存在の不条理性に、こうして直面するとき、嘔吐を催さずにはおれないであろう。道具―存在にもとづく技術的な世界観を超えて、事物―存在をとおして開かれてくる在るがままの自己存在の事実と逢着したこと、そこにサルトルにおける「嘔吐」の積極性は在ると言うことができるであろう。

嘔吐が嘔吐である理由を、さらにサルトルにおける「嘔吐」の積極性を、わたし（たち）は以上のように理解するとともに、しかしなお、嘔吐はわたしの存在そのもの、わたし自身にたいする一つの根源的な感じであり、わたしの存在そのものにたいする一つの受けとり方であることを見逃すわけにはゆかない。したがって、もしそうであるなら、嘔吐はわたしの存在そのものにたいする別な感じ方、別な受けとり方の可能性を排除することはできないであろう。たとえば、宮沢賢治のように、自分自身を「きれいな青ぞらとすきとおった風」として受けとることもできるのだ。

.....

あなたは医学会のお帰りか何か判りませんが

サルトルの『嘔吐』について

サルトルの『嘔吐』について

九二

黒いフロックコートを召して

こんな本気にいろいろ手あてもしていただければ

これで死んでもまずは文句ありません

血がでていにかかわらず

こんなのにんきで苦しくないのは

魂魄なからだをはなれたのですかな

ただどうも血のために

それを言えないがひどいです

あなたの方から見たらういぶんさんたんたるけしきでしょうが

わたくしから見えるのは

やっぱりきれいな青ぞらと

すきとおった風ばかりです

「眼にて言う」より

このように、嘔吐が自己の存在そのものにたいする、一つの受けとり方でしかないなら、つまり、他の受けとり方も

存在するのなら、その相違は自己の存在そのものの捉え方の相違からくるほかないであろう。わたしには必然的な存在理由がないということ、わたしが無償だということは、わたしの成立にかんし、わたしの事実的存在にかんし、わたしの力はまったく及ばない、指一本ふれることさえできないということ、自分を呪うこと、指一本ふれることさえ、ひとりの人としてこの世界のなかに事実的に存在するという、わたしの意志を超えた被決定性のもとにおいてのことであり、わたしはいつも、常に、決定するものなきこの絶対的な被決定性においてしか存在していないと言ふことにすぎない。したがって、わたしには必然的な存在理由がないと言ふこと、わたしが完全な無償だということを、わたしの存在の事実即して解するなら、それはなんらわたしに嘔気を催させるような事実ではない。それはむしろ、宮沢賢治のように自己そのものを、「すきとおった風」として受けとることを可能にする根拠をさえ示しているのだ。

五

嘔吐はどこからやってくるかという問題を明らかにしたあと、わたし(たち)はそれが嘔吐でなければならない理由を考えることにした。前節において、わたし(たち)は次のように考えた。嘔吐による技術的世界観の崩壊のあとに現われてくるむきだしの自己そのものに直面するとき、つまり、自からの意志によってこの世界にやってきたのではないにもかかわらず、いかなる必然的な存在理由もなしに生きてゆかねばならないという自己そのものの存在の不条理性に直面するとき、技術的世界観の安らかさに慣れ親しんできたわたしたちは嘔吐を催さずにおれない。しかし、嘔吐は自己自身にたいする一つの根源的な感じであり、一つの受けとり方である。したがって、嘔吐は自己自身にた

いする別な感じ方、別な受けとり方の可能性を排除するものではない。現実に存在する自己自身にたいする感じ方、受けとり方の相違は、自己存在そのものの把握の相違からくるほかない。ところで、わたしには必然的な存在理由がないということ、わたしが無償だということを、技術的世界観による自己把握との対比においてではなく、自己存在の事実在即して、解するなら、それはなんら嘔吐を催させるような事実ではない。

以上のような考察によって、「嘔吐が嘔吐である」理由を示すことはできるが、「嘔吐が嘔吐でなければならぬ」理由を示すことはできないことを、わたし（たち）は明らかにした。ところで、嘔吐が嘔吐でなければならぬ理由の存在しないことは、サルトルの嘔吐体験の限界を、したがって、人間存在の把握の限界を意味しているのではないだろうか。わたし（たち）はこの問題を、公園における「嘔吐」のあとのロカンタンの動きをむきだしの自己そのものにたいする態度、つまり救いということに焦点をあてて検討することにより、考えてゆくことにしよう。

一、二月二十日の公園における「嘔吐」の翌日、アニイに会うため、ロカンタンはプウヴィルを発つ。二月十三日会いにきてくれるよう、アニイが手紙をくれたので行くのだが、「嘔吐」体験を経た今、彼はただ会うためにではなく、アニイに救いを求めて、パリに行くのである。「私の経験した最も強烈な恐怖や嘔吐のさ中において自分が救われることをどんなにアニイに期待していたか、それを今になって知る。」しかし、アニイは救いを与えない。「私の過去は死んだ。ド・ロルボル氏は死んだ。アニイは戻ってきたが、それは私からあらゆる希望を剝奪するためだった」

二、アニイと別れたあとと始めて、ロカンタンは自分には生きる理由はないことを自覚する。「もはやいかなる理由も私には残っていない、私の模索した生きるための理由はすべて、皆逃げさった、そして他の理由をもはや

想像することができない」この死にも似た自由のなかで、ロカントンは嘔吐がまた戻ってくるであろうと思う。そして事実、翌二十八日、嘔吐はやってくる。「私はペンが放せないのである。私は△嘔吐▽を催すだろうと思う」彼は嘔気を遅らそうとして無益に日記を書きつづける。

三、二月二日、ロカントンはカフェで嘔吐に襲われた。嘔吐は彼から離れず、彼をすっかりとらえる。しかし、給仕女のかけた古いラグ・タイムを聞き終ったとき、彼のうちで、なにかが起る。「起ったこと、それは△嘔気▽が消えたということだ。静寂の中から声が湧き上ったとき、私は自分の身体が硬ばり△嘔気▽が消えたのを感じた」このような体験に基づいて、ロカントンが音楽に救いを求めようとしたことは疑いない。彼自身、蓄音器にかけさせる古いラグ・タイムや、このレコードが彼に与える不思議な幸福についてアニイに話したあと、次のように言っている。

「僕は考えた、その方面で見つけるか、探すか、することができやしないかと……」

ところが、二月二十八日、嘔気が戻ってこようとしているなかで、同じ古いラグ・タイムを聞きながら、ロカントンは音楽をも含めて、芸術に救いを求めることを拒否し、芸術に救いを求める者を「馬鹿者」、「ろくでなし」と非難している。音楽にたいするロカントンの態度のこの変化は、なにを意味しているのであろうか。それに答えるまえに、ロカントンが音楽をどのように見ているかを捉えねばならない。さしあたり、わたし(たち)は音楽に関して述べられている箇所をとりだしてみよう。

「重々しく唄れた声がふいに現われる。そして世界は、もろもろの存在の世界は消え失せる。肉体を持った一人の女がこの声を持っていた。女は一番美しい化粧をしてレコードの前で歌った。そして、その声が録音された。女

か、沢山だ。彼女は私のように、またロルボンのように存在した。私は彼女を識りたいなんて少しも思わない。しかしこれがある (*Il y a ça*)。これが存在すると言ふことはできない。廻転するレコードは存在する。その声によって調子づき、震動する曲は存在する。またレコードに強く感動を与えた声は存在した。聞いている私も存在する。すべてが充実し、いたるところに、緻密で重く柔らかい存在がある。しかしその柔らかさのかなたに、手の届きかねる、まったく近くにあるのだがあれ程に遠い、そして若々しく無慈悲で平静なあの、あの強靱さがある」(2月19日、月曜)

「内的必然として、自分のうちにそれ自身の死を誇らしくもっているものとしては、音楽の調べしかない。ただ、それらは存在しないのである」(2月20日、火曜)

「△それ▽は、ダイヤモンドの小さな苦しみは存在しない。たとえ私が立上って、そのレコードをそれを支えている廻転盤からもぎとり、二つに割ったとしても、私は△その苦しみ▽に達しないであろう。それは向う側に、常になにかの向う側に、たとえば声の、またはヴァイオリンの調べの向う側にある。存在の深い厚みをとおして、それは細くそして強い姿を現わすが、それを捕えようとすると、ただ存在するものにぶつかただけであり、意味を失った存在につまづくだけである。その苦しみはそれらの背後にあるのだ。私はそれを聞くことさえない、私はその苦しみを開示する音や、空気の震動を聞くのである。その苦しみは存在しない、なぜなら、それは余計なものをも一つ持たないからである」(2月28日、水曜)

以上の引用から、ロカンタン(＝サルトル)が音楽を次のように見ていたと言ふことができるであろう。即ち、音

楽、あるいは音楽の調べは存在しない、しかしそれはどのような仕方でも存在しないと言ふことではない、生きてるかぎりの音楽は常になにかの向う側に、たとえば声の、ヴァイオリンの調べの向う側にある、それは余計なものを何一つ持たない。音楽をこのように見ていたと言ふことから、ロカンタンは音楽に救いを求めたが、それは生きていくかぎりの音楽の在り方、つまり余計なものなさのうちに、存在の必然的な理由のなさ、偶然性、無償を超える可能性をみいだしたのだと、結論することができであろう。事実、ロカンタンは言う。「そして私もまた、苦しみと同じような具合に△在る√ことを望んだ。それだけしか望まなかった。これが私の生涯の最後の言葉である」彼は自分の外に存在を追いだすことによって、救いにいたろうとする。ただ、それが一体どのようにして達せられるかは、『嘔吐』においては不明なままである。しかし、わたし（たち）にはこの問題が、『存在と無』における即自→対自（en-soi-pour-soi）という考えに結実されているように思われる。即ち、対自（pour-soi）は対自としてのかぎりにおいて、△あるところのものであるような一つの存在√であろうと企てる。つまり、対自は自己自身についても「単なる意識によって、自己自身の即自存在の根拠であるような即自→対自であろうと企てるのである。」

ところで、サルトルは音楽の在り方から示されたことに、即ち自分の外に存在を追いだそうとすることに、救いを求めたというわたし（たち）の解釈にたいして、『嘔吐』においてサルトルは小説を書くことに救いを見いだそうとしたのだと反論される人がいるかも知れない。しかし、小説を書くという『嘔吐』の結末は、救いの不明確さの故に、サルトルが選ばざるを得なかった結末にならない結末以上の意味を持つことはできないであろう。

さて、公園における「嘔吐」のあとのロカンタンの動きを以上の三つにまとめてきたわたし（たち）は、これらのことがサルトルの人間把握にたいしてもつ意味を定着することにより、結論に達することができようであらう。

まず、嘔吐をとおしてむきだしの自己そのものに直面させられたロカンタンが、アニーに救いを求めたということは、彼が在るがままの自己存在を直視することなく、それから目をそらし、別なところに救いを求めたことを意味している。次に、アニーと別れてブウヴィルに帰った翌日、再び嘔吐がやってきたということは、ロカンタンが「嘔吐、それは私自身である」という自己理解に止まっていることを意味している。なぜなら、嘔吐は自己自身にたいする一つの感じ方、一つの受けとり方、しかも技術的世界観との関連の中でだけ起りうる受けとり方である。技術的世界観を超えて、自己存在の事実に即するとき、嘔吐はもはや私自身でありえない。したがって、自己理解がそこまで深まる時、嘔吐は決してわたしにやってくることはないのだから。最後に、ロカンタンは自己存在そのものにはなく、音楽に救いを求め、自分の外に存在を追いだすという音楽の在り方から導き出されたところのものに、救いを求めた。その救いは、むきだしの自己そのものを素直に引き受けることを拒もうとする試みであり、常に挫折する運命にある実現不可能な試みである。

かくて、公園における「嘔吐」のあとのロカンタンの動きは、嘔吐をとおして開かれたむきだしの自己自身を直視し、そこから在るがままの自己存在の根底が見えてくるまで待つという方向にはなく、在るがままの自己そのものを必然的な存在理由のなさという一点でしか捉えようとせず、それからは自己そのものの外へ逃れることだけ向けられていると言うことができる。それ故、『嘔吐』におけるサルトルは、彼自身、その後、『実存主義はヒューマニ

ズムである』の中で、「人間は自由であるべく呪われている」^(註5)と言った地平を、まるで見ていない。『嘔吐』におけるサルトルの人間把握は、技術的な世界観を超えて在るがままの自己の存在に逢着したかぎりでの人間把握であり、在るがままの自己存在の根底はなんら捉えられていないという限界を持っている。人間存在の把握のこの限界は、事物の、即自存在の把握の限界、したがって存在の把握の限界でもあるだろう。そうでなければ、存在にたいして恐怖をもったり、事物について必要以上に否定的な表現を用いたりすることは、自ずからなくなるであろう。これまで、多くの人は、『嘔吐』を『存在と無』をとおして読んできたが、わたし(たち)は逆に、『嘔吐』から『存在と無』へと読むことをしなければならないであろう。なぜなら、『嘔吐』におけるサルトルの限界が『存在と無』において、どれだけ克服され、また、どれだけ克服されずに買われているかを検討することによって、『存在と無』の、したがってサルトル哲学の積極性と限界とを、より明確に見抜くことができるように思われるからである。

註1 「日付のない紙片」であるが、刊行者の説明で一月初旬に書かれたものとなっている。

2 『嘔吐』は日記形成であるが、最初の日を除いては日付がなく、曜日だけである。曜日は一週間を飛ぶ可能性はまずないように思われるので、私の方で順を追って日付をつけていった。

3 *L'être et le néant.* (Gallimard). p. 14.

4 *L'existentialisme est un humanisme* (Nagel). p. 18

5 *L'existentialisme est un humanisme* (Nagel). p. 37